

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 安 大玉

17世紀の初め、イエズス会宣教師がヨーロッパの科学とカトリック神学を中国に伝え、中国人天主教徒を中心として新たに西学がおこったが、本論文は、李之藻編『天学初函』器編に収められた漢訳科学書についてその内容を思想史的に分析し、あわせて器編の受容が中国にもたらした思想的刺激について考察したものである。全体の構成は大きく二部からなっている。

第1部においては、当時中国に伝来した西欧科学の性格を理解すべく、16世紀のイエズス会の科学観についてクラビウスを中心にその特徴を分析し、数学的推論や論理的証明を重視するクラビウスの精神が中国に伝わったことを論証した(第2章)。またイエズス会来華宣教師の中国科学に対する評価を、マテオ・リッチを含む三人の宣教師の言説を通じて考察した(第3章)。

第2部は、『天学初函』器編所収の十部作の内容解明をその主要課題とする。第4・5・6章においては、『幾何原本』を中心とした演繹論理中心の西欧幾何学の受容を通して、中国に論理的証明・普遍的解法を重視する新たな傾向が生まれたことを論じ、中国の伝統数学が西学のフレームワークのもと、いかに再評価され、いかに再編されていったかを解明した。第7・8・9章においては、地円説やアリストテレスの宇宙論など、中世の西欧天文学のほぼすべての知識が導入されたことを考証し、中国伝統の天円地方の宇宙観が否定され、ついには清朝にいたって西法による改暦が行われるほど、大きなインパクトを与えたことを明らかにした。また清朝の公式的な西学の受容理論である「西学中源説(西欧科学のルーツは中国にあると主張)」の成立過程についても、思想史的分析を試みた。

本論文において第一に評価すべきは、読解の見事さである。たとえば『渾蓋通憲図説』はクラビウスの『アストロラビウム』 *Astrolabium* の漢訳本にすぎないが、従来、明清の天文学者を含めてその正確な理解に到達した者はいない。論者はラテン語の原本を探しだしそれを参照することによって、誰もなしえなかった第一歩を踏みだした。第二に評価すべきは、漢訳西学書の論理重視の特徴がクラビウスの精神に由来すると推定したことである。マテオ・リッチの漢訳書の底本が多くクラビウスにもとづくことを考えるとき、それ以外の可能性はあまりに少ない。明清期西学受容について論じるばあい、後の研究者は本論文を研究の基礎としなければならないであろう。

本論文には『天学初函』理編の解明など、今後に残された課題もあるが、従来の明清期西学研究のレベルを大きく超えてきている。論者には明清西学史の全面的な解明を期待したい。

審査委員会は以上にもとづいて、本論文が博士(文学)の学位に値すると判断する。